

つやま 津山

秋田純一(8,12,14,17,18,19 回参加)

津山、という街がある。岡山県津山市、高速道路では中国自動車道の津山I.C.、鉄道は姫新線・津山線・因美線と三路線が交わる交通の要所でもある。古くは美作の国府が置かれ、中世には守護所、そして江戸時代には、本能寺で死んだ森欄丸の弟・忠政が城を築いた城下町でもある。そんな津山へ始めて行ったのは、いつのことだったろう。6年ぐらい前のような気がする。何の用事で行ったのかよく覚えていないが、平日だからすいているだろうとたかをくくり、宿の予約はとっていなかった。たしか夜の7時ごろに駅に着いた。たしか真冬の、寒い夜だった。ちょっと暗くて、さびしい駅前だった。

さて、と電話帳をめくり宿探しを始めたが、1件目、満室。2件目も満室。おや？今日は混んでいるのかな？と思ったが、3件目も満室。ちょっと冷や汗が出てきた。4件目、5件目も満室。よく考えたらビジネスホテルは平日の方が混んでいるわけで、平日だからすいている、という論理は成り立たないわけだ。まだ岡山への最終列車があったので岡山まで出ようかとも思い、岡山の宿に電話をかけてみたが、やはり満室。かなり冷や汗が出てきた。寒い。

どうしよう、と途方にくれて駅前を少し歩いてみるた。ふと、「大黒屋」という古いさびれた旅館が目に入った。だめもとで入ってみると、空いているとのことだった。ありがたくて、涙が出てきそうだった。部屋のストーブをつけてもらっても寒気がしみてくるような夜だったが、宿をみつけれただけでも幸せだった。やはり「大黒柱」というのは頼りになるものだ、と妙な納得をしたりしていた。

翌日、津山の街を少し歩いてみた。大きな商店街があった。その真ん中のところに再開発事業で大きなビルができる計画があるようだが、地元商店会の反対にあって進んでいないようだった。街中の河原を歩いてみた。空ってこんなに広がったっけ、と思うような青空だった。

つい先日、鳥取で学会があった。山陰地方へ来たことで、しばらく前に津山へ来たことを思い出し、「大黒屋」へもう一度行ってみたいとなった。学会の帰りの土日、わざわざ津山を経由する切符を買い、米子から普通列車を乗り継いで、4時間をかけて津山までやってきた。

あれ？駅前はこんなににぎやかだったっけ。あのとき、暗くて寒い夜に、宿を求めてさまよったときとはずいぶん雰囲気違っていた。「大黒屋」があったはずの方向へ歩いてみるが、はっきりとした場所が思い出せない。たしかこの辺りだったはずなんだけど、という辺りへ来ても、それらしい建物はなかった。おかしいと思い、タウンページをめくってみた。しかし旅館の項にも、ホテルの項にも、ビジネスホテルの項にも、民宿の項にも、「大黒屋」の名前はなかった。ハローページをめくっても、やはり「大黒屋」はなかった。

はたして、あの夜に泊ったところは、本当に「大黒屋」だったのだろうか？あるいは、あのとき来たのは、本当に津山だったのだろうか？

町中の大きな商店街の真ん中のところには、再開発事業の大きなビルが建設中だった。今年の三月にオープンするそうだ。河原を歩いてみると、ちょっと曇った広い空といっしょに、建設中の橋が見えた。